

学校教育におけるニュースポーツ参入と生涯スポーツへの繋がりに関する一考察

A consideration about the connection to a new sports entry and lifelong sports in the school physical education.

1K08B232-3 横田 奨

指導教員 主査 吉永 武史先生 副査 宮崎 正己先生

【序章】

現在の学校体育は、学習指導要領の改訂に伴って、様々な種目を取り入れられているという現状がある。

私自身が経験した学校体育は、バレーボールやバスケットボールなど、いわゆるオールドスポーツを用いた授業を受けてきた。それらのスポーツに関しては、運動部活動としても学校内に存在し、経験者も多数いるという状況であった。そのようなスポーツを使用し、体育の授業を実施していたので、経験者にとってはそれらのスポーツを行うことは容易であり、積極的にその授業に参加できる。しかし、未経験者の立場になってみれば、ゲームは愚か基本技術もままならない状態で、その授業に参加するということになる。未経験者にとっては、体育授業自体が億劫なものとなり、参加の姿勢も次第に消極的になる。体育嫌いを作る原因ともなり得るのである。

このような現状を打破するために、すべての子どもたちに平等な運動機会を与えることが出来、かつ一定の運動量を保証することのできるニュースポーツを単位教材としてではなく、単元教材として学校体育により多く参入していくべきではないかと私は考える。

スポーツ習慣の基礎をつくる学校体育を充実させることによって、子どもたちの運動選択肢は増える。選択肢が増えることによって、幼少期に行なったスポーツが生涯スポーツへと繋がっていく可能性が高まることが予測できる。また、オールドスポーツに関しては、運動量も多く、生涯スポーツに繋げることはなかなか難しいように思える。

私は自らが受けてきたオールドスポーツ中心の体育の授業を踏まえた上で、ニュースポーツの持つ可能性について模索した上で、それを学校体育に参入することで何が期待できるのかそして、何よりも幼少期に行なったスポーツをいかに生涯スポーツへとつなげていくことができるかを模索したいと考え、本研究を行うことにした。

【第1章】

第1章では、ニュースポーツが生まれた背景について、論を展開した。ニュースポーツは一旦、近代スポーツを経て、過去の民族スポーツの形を残しつつ新たなスポーツの形として発展を遂げてきたものもあるということが分かった。それらニュースポーツ発展の背景を述べていく上で必要なものが、近代スポーツと後近代スポーツの適合原理の違いである。時代が求めるスポーツはその時代ごとに異なる。また、スポーツ自身の原理だけでは到底成立することはないのである。その時々起こった事柄や背景などが、スポーツにも強い影響を与えるということが分かる。

【第2章】

第2章では、現代におけるスポーツの在り方を、検討した。また、現代スポーツが持つ諸問題について、模索をした。2011（平成23年）年のスポーツ基本法の施行により、現代スポーツは大きく変化を遂げ、新たなスポーツの在り方が位置づけられるようになった。その大きな変革の理由は、成人病（生活習慣病）と子どもの体力低下の2点が主である。この2点はスポーツ界の大きな課題であるとともに、社会にとっても大きな課題であることは間違いないであろう。

【第3章】

第3章では、1章・2章での検討を踏まえ、どのように生涯スポーツにスポーツを繋げていくべきかという考察をした。スポーツは時代に応じて変化している。現在ある既存のスポーツも、様々な進化を遂げ、現代スポーツというところまで至った。しかし、その現代スポーツにも、以後新たな問題が現れてくるということは大いに予測できる。スポーツ振興基本計画が目標にした、成人のスポーツ実施率50%を達成した現在では、それをいかに維持し、世代間の格差を埋めるかが課題である。これからはスポーツという活動に、新たな付加価値をつけ、より浸透しやすいものとして位置付けることによって、それらが生涯スポーツへと繋がっていくのであると私は考えた。